

品質カイゼン室の花のソコが知りたい

パンジー編



秋から春まで花壇の女王となるパンジー。切り花としても人気の品目ですが、今回はシーズン真っ只中の鉢物パンジーについて注目していきます！！



●パンジー スミレ科スミレ属

原産地：ヨーロッパ 学名：Viola

名前は“思い”や“考え”を意味するフランス語「pensee」に由来します。

パンジーが頭をたれて物思いにふける人の顔に見えるところからこう呼ばれるようになりました。

日本では江戸時代末期にオランダから渡来、「遊蝶花」や「胡蝶堇」と呼ばれていました。

パンジーとピオラの違いって…??

一般的に花の大きさの違いだけで、小さいものはピオラ、大きいものはパンジーと区分しています！



●パンジーの模様

パンジーといえばその特徴的な模様。

中心部にあるインクのにじんだような模様は「ブロッチ」といいます

ブロッチのないものや筋状のもの、様々なタイプがあります。

主な産地：千葉、和歌山、高知、宮崎、山形、埼玉、神奈川



●栽培(鉢物)

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
					加温(最低5℃)					
	播種	←		→		出荷				
定植・セル苗・電照・摘花・マルチ										

※播種を後ろにずらすことによって切花・鉢花ともに最大4月一杯まで収穫可能です

※切花の出荷ピークは3-4月です ※栽培方法の画像は鉢物の場合です。



8月上旬から植え始めたパンジー。出荷まではあと2か月。播種後5〜7日前後で発芽、適温は17-25度とされています。出来れば地温は25度以上にならないように気をつけなければなりません。また、夏場の高温期などは冷水で灌水を行うのが良いとされています。発芽を始めた初期は種が水によるストレスを受けやすいので注意です。

POINT★良いパンジーを育てるための温度目安★
双葉が揃ったら光の強さがとにかく必要！！
昼温は15〜20度、夜温で10〜15度が適温範囲です。

上写真の苗状態からもう少し大きくなったら圃場へ。双葉が揃うときまでは光の強さは約4500 lx。その後は十分な陽光が必要になります。光が不足すると生育を抑制してしまいます。※催芽後は暗所で胚軸が徒長(間延び)してしまうので、光で徒長を抑える効果もあります。



こちらは8月終わりくらいの圃場の様子。パンジー栽培では生育に応じた追肥を行います。液肥にて週1回程度が目安です。不足すると葉色の緑が淡くなったり、葉肉は薄く、葉柄が伸び、苗は徒長します。過肥だと葉色は黒々となり、葉は内に巻くような形状になります。濃度障害を起こすと、葉はスプーン状またはその逆に巻き込み、新葉に鉄欠乏症の白いクロロシスが現れます。



出荷まであと少し！！9月上旬の様子です。一般的には、1輪咲いていて次に咲く花蕾が既に株元で待機している状態が望ましいです。高温期は蒸れないように、低温期は凍霜害に注意が必要です。出荷前は環境変化することを想定し乾湿の差をつけたり、通風をよくすることも重要です。



栽培用土に向いているのは、水はけがよく通気性に富む適度に保水力のある土です。栽培写真の神奈川県の永田農園さんでも土づくりと品種選定が栽培の重要ポイントだそうです！！



★開花時の温度と色の濃淡の関係性について

パンジーは開花時の気温・日差しの強弱で花色が変化します！！

本来の開花期である3月下旬から5月は、気温が上がり日差しが強いため、鮮やかで濁りのない発色に。冬は気温が低く日差しが弱いため、くすんだ濃い花色になり、秋口や6月は気温が高すぎて、夜温が下がらないため、花色が薄くなります



※ブルーやピンク系が特に影響を受けやすい

パンジー&ビオラの品種たち

デルタシリーズ



虹色スミレ



ビオラ(ペニージャンプアップシリーズ)

冬の花壇では貴重な刺し色として大活躍します。
ドライフラワーにするのも素敵ですね。色々な場面で活躍するパンジー
皆さんもお花のある生活を楽しんでくださいね♪

●参考文献

写真提供 株式会社永田農園様

農山漁村文化協会 発行「農業技術体系 花卉編 第8巻」

宇田明 桐生進 著「花屋さんが知っておきたい花の小事典」

サカタのタネ 失敗しないパンジー・ビオラ

http://sakata-netshop.com/about/campaign/pansy_viola_easy/index.html



品質カイゼン室